

踊る美人像

野村胡堂

青空文庫

不思議な手紙

「兄貴、こいつは一杯食わされたらしいぜ」

「叱ッ」

関東新報の社会部長で、名記者と言われた千種十次郎ちくさは、好んで斯こんな伝法な口をきく、部下の早坂勇——一名足の勇——をたしなめるように、霞門の方から入って来る狭い道を指しました。

「あれを見る勇」

「女だ」

「しかも、若くて美しくて贅ぜいたく沢たくな女だ」

「成程、こいつは面白い」
なるほど

二人は口から耳へ、斯う囁き交してフツと口を噤つぶみました。

日比谷公園の新音楽堂の裏手、滅多めったに人の来そうも無い、忘れられたようなベンチを見守つて、一時間余り我慢して居た二人だつたのです。

若くて美しくて贅沢な女は、ベンチの傍まで歩み寄つた。不安そうに四方あたりを見廻し乍ながら、崩折くずおれるように腰をおろしました。少し遠い電灯は、青白くその顔を照し出します。

二人の新聞記者は、黙つて藪の陰にうなずき合いました。この美しさは、間違えようもありません。帝都劇場の花形柳糸子の目を忍ぶ姿だつたのです。

広場は躑躅つつじの客で一杯ですが、此この辺は森閑として人の気配もありません。時々風の具合で、寄る浪のように聴えるのは、ヨハン・シュトラウスのワルツらしい。柔かい甘い旋メロデー律です。

千種十次郎を、此ここ処におびき寄せた不思議な手紙は、ツイ三時間ほど前に新聞社に配達されました。渋谷局から出した速達書留で、中には斯う書いてあります。

——素晴らしい新聞種を提供しよう、今夜九時頃、日比谷公園新音楽堂裏のベンチを見張って居るが宜よい。但ただし姿を見せると鳥が飛ぶぞ。——

新聞社へ舞込んで来る投書は、十中八九まで馬鹿気たものですが、此手紙には、捨鉢な文句のうちは何んとなく心惹かれるものがありました。手の空いて居る足の勇を促して、公園の闇に踞しゃがむむというのは千種十次郎ほどの顔になれば容易の事ではありません。

テンポの早い生活

十分間ばかり美しい女優は凝じつとして居りました。やがて、
「チエツ」

舌打を一つ、ベンチから身を起します。わざと目立たぬように、地味な和服を着ては居りますが、贅沢癖は夜目にも隠せず、身体からだを動かす毎ごとに、虹のような宝石が、身体からだのあちこちからキラリキラリと光ります。此時何処どこから飛出したか、

「……………」

黙つて女優の行手に立ち塞がったのは、腐つたソフトを鷲掴みに、素すあわせ裕ゆを着流した痩せた男、百舌もずの巣のような髪の下から妙に大きい眼が二つ、魅入るように美しい女優の顔を見詰めます。

「あッ」

女優は一步下りましたが、気を取り直して遠い灯に男の顔をすかし乍ら、

「矢張り貴方ねえ。手が變つて居るから變だとは思つたが、あんな事を言われると来ないわけには行かない——」

勝氣らしい次高音メツオソプラノが、夜の空氣に艶めなまかしく響きます。

「斯うでもしなければ、俺に逢つてくれるお前では無い」

「そう判つて居るだけ感心よ。サア、物わがりの良い坊ちゃんは、こんな氣障きざに筋書を書くものじゃない、黙つて私わたしを歸らして頂戴」

「いけないよ」

「じゃ、何どうしようと言うの」

「これでも昔の良夫おつとじゃないか、一時間や二時間は付き合つてもよからう」

「御免蒙るワ。今晚は私のアパートへ大勢客を招よんで居るから、

昔の亭主などを相手にしちや居られない。御存じの通り私の生活はそりやテンポが早いんだから」

「何？」

あなた

「貴方の顔を見ると、胸が一杯になるといふ事なの、横須賀行の電車見たいな顔だわねエ。ホ、ホ、ホ、ホ」

抑え切れない嬌笑が、闇の中に突つ走ります。

「畜生ツ、まだ俺を馬鹿にする気か」

「あら、御免なさいよ、そんな気じゃないワ。だけど、本当に今晩は付き合つちや居られない、次にして下さいな。無期延期よ、ね、ね」

「いけないよ。お前の為に、名誉も財産も、体面も自尊心も失つ

てしまった男が、最後の怨みを言う為に此機会を作ったんだ。男から、男へ、庭石を踏むように渡つて歩くお前でも、丹波高一のこの落ちぶれ果てた姿を見たら、少しは何んとか思うだろう」

「お気の毒様、何んとも思つてやしないワ。一年でも半歳でも柳糸子ほどの女を儘ままにしたんだもの、五万や十万の身上を棒に振つたつて、何んでもないじゃないの。丹波さん、左様なら。もうこんな気障きざな事は止して頂戴、益々可愛気がなくなるばかりだワ、ホ、ホ」

つと身を翻かえして、霞門の方へ逃げようとする女優の襟首へ、男の手はむずと加わりました。

「あれエ——」

「ウフ、いい思い付きだ、出来るだけ大きい声を出して見ろ。帝都劇場の柳糸子が、元の良夫おつと——乞食のように落ちぶれ果てた丹波高一——に手籠てごめにされたと判ったら、東京中の新聞屋がどんなに喜ぶかわからない」

「畜生、畜生ッ」

「それで無くてさえ、この芝居にはちゃんと見物があるんだ」

「えッ」

「驚くなよ、今直すぐ殺そうとは言わない」

「いったい 験たいどうすれば宜いいで、早く言っておくれ」

「お易い御用だ、俺が心血を注いで彫った、あの『踊る美人像』を返してくれ。お前という者に愛想が尽きると、俺は急にあの彫

刻が恋しくなつたんだ」

「厭だよ。それに、あんな大きい物を持って歩いてるわけじゃない」

「今でなくて宜いよ、後日の為に抵当だけ受取つて置こう」

「抵当なんか持つちや居ないよ」

「第一にその指環ゆびわを渡すさ」

「これはお前——」

「知ってるよ、近頃夢中になつて居る、石郷いしごう氏が買つてくれたんだらう」

「……………」

柳糸子は黙つて指環を抜きました。こんなもので済めば幸いと

言つた色が、その美しい顔の表情をひどく昂たかぶらせます。

「それから帯」

「えッ」

「それだつて安くは無かつたよ。俺が買つてやつたんじや無いか、俺が剥くのに不思議はあるまい——」

争うことの不利益を覚つたのか、糸子はクルクルと帯を解きま
す。

「それから着物だ」

「あなた貴方は、まさか私を裸にする積りじや無いだらうね」

細帯一つになつた女優は、丹波高一の冷酷な事務的な言葉を聞
いてさすがに顛ふるえ上りました。

「お前は一度俺を裸にしたじゃないか。俺は何も彼も失^かなつてしまつたが、お前は家へ帰ればまだ沢^{たくさん}山の物を持つて居る。此^{ここ}処^こから虎の門のアパートまで、花形女優の柳糸子が、裸で道中するのも洒^{しやれ}落^れて居るだろう」

「えッ」

「サア、脱ぐんだ。厭なら手伝つてやろう。不服なら巡査でも次馬でも何んでも呼んで見るがいい」

恐ろしい復讐でした。日比谷公園から虎の門まで、織るが如き往来の中を、花形女優に裸で歩かせようというのは、何んという^{つむじ}旋毛の曲つた企てでしょう。その上関東新報の記者を二人、藪陰の特等席へ呼んだのは、今は間違いもなくこの男の仕業^{しわざ}だという

ことが判ります。

「厭、厭、いや」

「脱げと言ったら脱ぐんだ、脱がなきやア」

不気味な眼が二つ、気違い染みた熱心さで、美しい女優の姿を追います。手には何やら刃物を持って居る様子、強^たつて厭だと言ったら、どんな事をするかわかりません。

飛出そうか、飛出そうかと潮時を見て居た足の勇も、妙に悩ましい丹波高一の眼に射すくめられて、おいはぎ剽盗退治の一役を買って出る出鼻を挫かれます。

「畜生ツ、柳糸子ほどの女を剥ぎやア、貧乏彫刻師はさぞ本望だろう。モデル代は安くないよ。見るがいい」

女は細紐を解きました。それでも灯に反そむいて、袴の襟を滑らせると、丸い真珠色の肩が、夜の空気にはほのかに匂うようです。

新聞記者操縦

「勇、あの男を追っかけるんだ、それから、一番先にでっくわ出逢した自動車を呼んで、霞門の外で待つて貰うんだ」

「合がってん点」

綽あだな名まで取った得意の章いだてん駄天です。中距離競走の要領で駆け出す勇を見送つて、千種十次郎は女の側へ、

「サア、柳さん。せめてこれでも引っかけて、外へ出ましょう」

セルの上へ羽織った紹ろの夏羽織を取って、消えも入りそうな真珠色の女の肩へ掛けてやります。

「アツ、千種さん」

商売柄、この名記者を見知って居た柳糸子の顔には、新しい苦悶の色が浮びます。

「何んにも知らずに、無名の手紙で呼び寄せられたんです。併しかし、新聞記者は見た事を、皆んな新聞へ書くものと思つたら、あの男は大変な違算をしたでしょう」

「え、じゃ今晚の事は」

「大丈夫、書きやしません。それより急いで帰りましょう。勇は多分霞門まで自動車を廻して居てくれたでしょう」

「有難う、千種さん、本当に感謝するワ」

この美しい女優を抱き上げるように、公園の外へ出ると、果して一台の自動車が人待顔に停つて居ります。

不思議そうな顔をする運転手には、百円札を何枚か、それで何も彼も封じてしまいます。紹の羽織に包まれた、美しい女優と並んで、虎の門のアパートに着いたのは、九時半過ぎでしたらう。

「千種さん、此処ここから帰つちや厭よ。今晚は私客をして居るんです。貴方あなたも臨時のお客になつて、玄関から真つ直ぐに私の部屋へ通つて下さいネ。私は裏からそつと入つて、女中に着物を持って来さして入つて行くわ。宜いいでしょう、ネ。そうでもしないと、お客様の手前を誤魔化ごまかし切れないワ、一寸ちよつとの間だけ、久美子に

繋ぎを頼んでは来たけれど——え、帝都劇場の橘久美子よ——あの人はドジだから心配よ、ね、ね」

「……………」

千種十次郎は、それにも拘かわらず、此まま帰ろうかと思いましたが、柳糸子は早くもその気振けりを察して、

「貴方あなたは、本当に親切よ、しっかりお礼がし度たいワ。ね、帰っちゃ厭いや」

いきなり柔かな腕が十次郎の身体からだを引止めます。

歡樂の渦

「あら、何^どうなすったの」

「お客を放り出して、雲隠れはひどいよ」

「随分長かったワ」

「まさか夜逃げをしたんじやあるまいね」

一座の客は、柳糸子を取り巻いて半円を描きました。皆^みんなで六人、半分は女優で、半分は男、金と智慧には困ったことの無いような顔をして居る人種ばかりです。

美しい主人公の帰ったのを見て、急に踊りの輪が崩れたのでしよう。電気蓄音機に掛けっ放しにされたジャズのレコードは、一番俗悪で、一番刺戟的な歌を、臆面もなく歌い続けて居ります。

「済まなかったワねエ。その代り、すばらしい冒険をやっちゃつ

たワ」

「何^どうなすつたの」

「日比谷公園へおびき出されて、身ぐるみ剥がれちゃつたの。成
つちや居ないワねエ」

「まあ」

成程、気が付いて見ると、何時^{いつ}の間^{かん}にやら糸子の着物が變つて、
飛上り、西洋人が着るような、素晴らしい友禅縮緬^{ちりめん}の单衣^{ひとえ}にな
つて居ります。

「その代り、私を救つてくれた一人の勇士を紹介するワ。千種十
次郎、関東新報社の社会部長よ。この方を知らないと、芸人でも、
芸術家でもモグリにされるワ」

指ゆびさされた入口の扉を背にして起たつたのは、この空気とは相そぐ応ぐわ
ない、名記者千種十次郎の和服姿です。知つてる顔も知らない顔
も、一わたり軽い目札を交わすと、話題の中心は又柳糸子の襲撃
事件に移つて行きます。

「で、何どこ処こも怪けが我がは無なかつたのかい」

有名な石郷氏は楔くさびがた形がたの髭を反らせて、斯う鷹揚に言います。
柳糸子の新しいパトロンを以つて任じて居る富豪で、言葉遣いの
尊大なのは、身分柄のせいばかりではありません。

「怪けが我がなんかしないけれど、公園の真中で身ぐるみ剥がれちやつ
たんだから、そりゃ口くちや惜やしかつたワ。こんな事と知つたら、これ
でも持つて行けばよかつたのに」

部屋の中程、窓際に据えたテーブルの抽斗ひきだしを開けて、糸子は
何やら光るものを取り出します。

見るとそれは、拳の中へ隠れてしまいそうな、華奢きゃしゃな短銃ピストル。
「危いじゃないの、そんな物を振り廻しちや」

「大丈夫、これでも弾はちゃんと六発共こめてあるんだから」

「あッ、尚なお悪いわ」

「凝じつとしてお在いで、的いが動ういちゃ困まる」

「冗談じやない。お止としよ。あれッ」

金切声をあげて飛上ったのは、同じアパートの隣りの室へやを借り
て住んで居る、篠井智恵子しのいという、同じ帝都劇場の花形、柳糸子
に劣らず美しい癖に、柳糸子と姉妹のように仲よくして居る女優

でした。

競争者の地位に居るこの二人が、こんなに仲の良いことは、帝都劇場に取つても、どんなに幸せだったかわかりません。尤も柳糸子は喜劇的で明るくて、篠井智恵子は悲劇的で暗く、同じように美しいうちにも、性格も役柄も違つて居るのが、却つて二人の友誼ゆうぎを濃こやかにしたのかもわかりません。

十坪ばかりの室へやの中を、美しい男女は暫しばらく、キヤツキヤツと逃廻りました。これは糸子が客間とも居間ともなく使つて居た室へやで、一方は境の扉とは嚴重とぎに閉しては居るが、篠井智恵子の借りて居る室へやに通じ、一方は廊下を隔てて女中部屋に面し、一方は窓、一方は小さい寢室に扉一つで通じて居ります。

部屋の調度はなかなか洒落たもので、窓掛も、椅子も、卓子も、飾電灯も存分に贅沢な趣味と、無法な浪費とを物語つて居ります。建築はこの節の高等アパート並に鉄筋コンクリートですから、夜中まで騒いだところで、同宿人を困らせるようなことは滅多にありません。

暫らく女達を追い廻して居た糸子は、いきなり長椅子の上へ身体を投げ出して、

「ア、ア、何んて臆病な人達だろう、そんなこつちや、鉄砲屋の前も通れやしない」

「短銃が怖いんじゃない、持ち手が恐ろしいんだワ。全く何をするか解らないから——」

「言ったね智恵ちゃん」

「言わなくってサ。少し今晚はどうかしてるワよ」

「そうだろうとも、日比谷公園へ引つ張り出されて、身ぐるみ剥がれて御覧、誰だって少しはどうかするから」

智恵子は同じ長椅子に腰を下して、そつと糸子の短銃^{ピストル}の手の上へ自分の手を持って行きました。油断を見て、取り上げようと思つたのでしよう。派手な和服と派手な洋服と、凡^{およ}そ似つかわしくない二人の様子ですが、その辺に醸し出される空気には、何んとかなく舞台の上のような劇的な趣があります。

「どっこい、そんな事だろうと思つた」

「ワツ」

智恵子は短銃ピストルを突き付けられて、驚いて飛上りました。油断を見すまして取上げようとしたのが、見事にしくじってしまったのです。

「皆んな怖がるから、斯うしようね智恵ちゃん」

糸子は立ち上つて、室へやの一方——書齋に使つて居る大卓テーブル子の後ろのカーティンを引きました。重い織物に淀んだ光が、サツと入つて行くと、中から現われたのは、踊つて居る美しい女——と見たのは、凡およそ世にも精巧に出来た等身大の美人像です。

短銃ピストルは美人像の手に

「あ」

一座の人々は思わず感歎の声をもらしました。噂にだけは聞いて居りますが、柳糸子が魂を打込んで可愛がつて居るといふ、これはその道でも有名な美人像だったのです。

元よりザラのシヨウウインド飾 窓 などにあるような人形ではありません。

一時世に鳴らした彫刻家丹波高一が、心魂を打ち込んで刻んだ出世作で、鑿のみの跡も匂うような木彫に、木目を生かす程度に彩色を施し、素人眼しろウトメには、限りもなく美しく仕上げたものです。

三年ばかり前さる展覧会に出品されて、囂ごうごう々たる賛否の中に世の視聴を集めた作品ですが、その頃から有名になりかけて居た女優の柳糸子が、作者の丹波高一にせがんで貰い受け、それが縁

になつて、二人は同棲するまでになつた由来付きの彫刻です。玄く
ろうと
 人筋からは、題材が今様に過ぎて、卑俗ではないかと言われ、
 美しい淡彩も当時専門家の間には、大分論議の種になつたことも
 あります。

それにも拘らず、素人の人気は非常で、会期中この像の前は観
 客の黒山を築き、絵ハガキの売高はレコードを作つたと言われて
 居ります。上品な夢見るような顔も美しいが、とりわけこの像の
 値打は、その顔の高雅な表情に似ず、妖艶極まる不思議な媚態ポーズだ
 とされて居りました。

「これなら宜いいでしょう」

糸子は「踊る美人像」の前に立つて、短銃ピストルをその右手に持た

せましたが、踊りの姿勢になつて居る手になかなか短銃^{ピストル}は止まつて居ません。

「悪い人は遠慮なく撃つておくれよ、ね京ちゃん」

袂から手^{ハンケチ}巾を出してとうとう美人像の手に短銃^{ピストル}を結えてや

りました。——京ちゃん——というのは、その頃丹波高一と柳糸子が、愛の巢を見守つて居るこの「踊る美人像」につけた名前だつたのです。

「少し埃つぽくなつて居るワ。可哀そうに」

^{ついで}序に袖で埃を払つて、人形の冷い頬へ、自分の温かい頬を。

「あら、石郷さん、妬かなくなつて宜いワ。これは魂があるにしても女の人形よ、ホ、ホ、ホ、ホ」

もう一つ、美人像の頬に自分の頬を当てて、つと身をかえ翻します。

「さア、踊りましようよ、滅茶滅茶に」

電気蓄音機が再び獰猛にフォックス・トロットを唸つて、女中は忙せわしく盃グラスを運び代えます。

「明日は帝都劇場の初日だろう、もうボツボツ引上げた方がよくは無い？」

石郷氏は、誰へともなく斯う言います。多分皆んなは引上げてくれ。私わしだけ残る、と言つた謎だつたかも知れません。

「宜いいわよ、まだ十時少し廻つたばかりじゃないの。十二時までは大丈夫よ」

踊りの輪は又活いきいき々と廻り始めました。和服姿の千種十次郎は

そぐわなない心持で、マジマジとこの歓楽の渦を眺めて居ります。入るべからざる禁苑に入り込んで、見ては悪い妖精の乱舞を見て居るような、異様な自責に息がはずみません。

踊りの輪は妖しくも華やかに咲き崩れます。アルコールに浸った狭い室^{へや}の空気は、この六人の男女を氣違い染みた亢奮に誘つて行くのでしよう。

「千種さん」

そつと囁くように呼びかける者があります。振り返ると、日蔭に咲いた花のような、若い淋しい娘が一人、物言い^{たげ}度氣に十次郎の顔を差し覗いて居ります。

「何誰^{どなた}でした」

「私——柳の妹、雪って申します」

柳糸子に美しい歌い手の妹があることを聞かないではありませんが、それが、歡樂の渦を巻くこの室の隅^{へや}つこに、置き忘れた人形のように、誰にも構われずに居ようとは思ひもかけなかつたのです。

尤も、気が付いて見ると、雪子は足が悪かつたのです。足の悪い人が、ジャズに踊り狂う一座に入つて居たら、どんなに見^みじめなものか。十次郎はツイ同情らしい眼を、この娘の淋しい顔に注いで居りました。

「申上げ度いことがあるんです、そして御智慧を拝借し度いことが——」

訴えるような眼差しまなざしを見ると、十次郎はツイ斯う言わなければなりませんでした。

「廊下へ出ましょう。少し風に吹かれないと毒です」

二人は廊下を真つ直ぐに進んで、このアパートの浅いベランダに出て居りました。

「千種さん、今晚姉の身の上にどんな事が起つたでしょう。詳しくお話し下さいませんか。私、心配で心配でたまらない事があるんです」

雪子は物の影のように、淋しく寄り添います。

「と言うと——」

「姉の命は、誰かに覗ねらわれて居るんです」

「どうしてそんな事がお解りです」

「御存じの通りの姉ですから、一向気にしません、それはそれは恐ろしい脅迫状が、毎日のように舞い込むんです」

「……………」

「それから、舞台上で姉の頭の上へ、倒れる筈のない大道具が倒れたり、姉の取り寄せたランチへ、毒薬が振りかけてあったり、後から後からと怖いことが起るんです」

この姉思いの妹は、本人の糸子よりも神経を悩まして居るのでしよう。斯う話すうちにも、細ほつそりした身からだ体は痛々しく顫えて居ります。

「それは放って置けない、明日にでも私から、警視庁の花はなぶさ房君

に話して、何んとかして貰いましょう。まあ、あまり心配しない方が宜いでしよう」

気休めと知りつつも、十次郎の口からはツイこんなお座なりが出ます。それほど相手の雪子は物怯えがして居たのです。

恋の敗残者

「新聞屋の先生、面白かったろう。ハツハツハハハハ」

斯う声をかけられて、足の勇は思わず立ちすくみました。後を尾^つけて来た相手に呼びかけられては、誰でも一寸^{ちよつと}面喰います。

「驚くなよ、わざわざ手紙で招待して、特別席からの活劇をお目

にかけたんだ。遠慮することは無い。明日の新聞には、三段抜か
なんかで頼むよ、『女優柳糸子、日比谷公園で身ぐるみ剥がる』
なんていうのは。全く良い標題みだしだぜ、ちと特種料を出しな——」
勇の前へヌツと片手を出したのは、言うまでもなく彫刻家丹波
高一という落ち果てた姿です。

「尤も、亭主が女房を剥いだんだから、これは泥棒じゃないぜ。
面喰って恐れ乍らと極きめると、飛んだ恥を搔くかも知れない、念
の為に申して置くがね——」

「……………」

「君なんかも、この術てはチョコクチョコ用いるだろう。ハツハツハ
ハ、隠すな隠すな。何？ まだ女房が無ねえ、情ねえ男だな、女房

が無きやア女給でも守もりつ娘でも剥いで来るがいい——」

二人は何時いつの間にやら日比谷の電車通へ出て居りました。

「其その辺で一杯やろうよ」

今度は勇の方から水を向けます。

「有難いね。君はなかなか種取りに熱心だ、キット出世するよ」

足の勇は忌々いまいましそうに舌打をしました。それでもこの男を

逃がすのが惜しかったので、最寄のバーへ引張り込んでしまいました。

それから三時間あまり、二人はすっかり肝胆相照あいてらして、数寄

屋橋から銀座へ、手当り次第に五六軒飲み廻りました。どちらもイケる口で、話が面白いと来て居ますから、初めは苦々しいと思

った足の勇も何時の間^{いつ}にやら、この小汚いボヘミアンと腕を組んで、銀座のペーヴメントを、鼻唄で押し廻すほど酔って居りました。

「ゲープ。ネ、新聞屋の先生、それに付けても女は悪魔だ。君なんかも気をつけなくちやいけないぜ。——柳糸子だって、昔はあんな女じゃ無かつたんだが、何時の間^{いつ}にやら淫蕩の生活に踏み込んで、今じゃ手の付けようの無い妖魔になっちまいやがった。あの女の為に身上や名誉を棒に振った男は何人あるか算^{かぞ}え切れはしない。俺なんかもその一人さ。自殺したり殺されたりした人間もある筈だから、これでも俺は浅傷^{あさで}の方なんだ」

淫怪な妖魔、柳糸子の罪悪史が、アルコールに燃えさかる丹波

高一の舌で、残すところ無く描き尽されました。

「サア、電車が無くなつたようだぜ、帰ろう」

と言ひ出したのは、七軒目のバーで、十二時を聞いた時でした。「ね、新聞屋の先生、こんな特別上等の特種を持って行くんだから、どうせ今晚の会計は官費にして貰えるだろうが、それにしても、丹波高一ともあろう者が、一銭も出さないとわれちや恥だ、なア亭主、これでも取つて置いてくれ」

時間過の客に氣を揉んで居る亭主の前へ、ポンと投^{ほう}り出したのは、先刻^{さつき}柳糸子の指から抜いて来た、ダイヤ入の指環です。

女優の怪死

女優柳糸子が、不思議な死しにざま様をしたと知れたのは、その翌日の午後、夕刊の締切近い時刻でした。

「勇、飛んで行ってくれ。出来るだけの事をして検視の模様を夕刊へ入れるんだ」

「よしッ」

足の勇は自動車の後押しも仕兼ねまじき勢で飛出しました。

千種十次郎は飛んで行って見度いと思いつつも、夕刊の仕事があるので何どうすることも出来ません。日頃「編へん輯しゅう者者は、窓の外で人殺しがあっても、卓テーブル子子から動くな、冷静を欠くのは一番悪いことだ」と言つて居る編輯長の手前、用事にかこつけて外へ

出るわけにも行かなかつたのです。

その内に「女優殺しの情報」が、いろいろの方面から集つて来ます。幾つかの社会部通信、市内通報員の電話、特別通信——などを総合して、千種十次郎は夕刊の記事を整理しなければなりません。

午後二時、最後の締切という時まで集まつたところによると「女優柳糸子の怪死」に関する情報はザツトこんなものでした。

——昨夜、柳糸子の客が帰つたのは十時半頃、糸子と特別関係があると思われて居る石郷氏は、皆んなの後まで残つて、何か糸子と争つて居りましたが、それも十一時前には引揚げてしまひました。話の内容はわかりませんが、その時まで姉に暇乞いをしよ

うと思つて廊下に残つて居た妹の雪子と隣室を借りている女優の篠井智恵子が、激しい言い争いのあつた事を証言して居ります。

石郷氏と雪子と前後して帰りました。隣室の篠井智恵子が電灯を消して寝たのは丁度^{ちやうど}十一時、それから、このビルジングに一人の訪問者も無かつたことは、門番夫婦が明言して居ります。

明る日——という今日です、何時^{いつ}も十時頃に起きる糸子が十時過ぎても顔を見せなかつたので、廊下を隔てた女中部屋に居る、女中のお直^{なほ}が先^まず心配し出しました。

十二時には帝都劇場から電話が掛かつて来まして、初日の打合せがあるから、二時前には楽屋入をして貰い度いというのです。

お直はそれを取次^どごうとしましたが、何^どうしても扉^とは開きません。

ノックしても駄目、大きい声で呼んでも駄目。仕方がないので、門番を呼んで来て、代りの鍵で扉とを開けてもらったのです。

女中のお直は鍵を持って居なかつたばかりでなく、糸子の持つて居た鍵も、扉との鍵穴へ内から差込んだままになつて居りました。扉とは当然糸子の手で内から閉め切つたままと見なければなりません。門番の代鍵は手提金庫に入れて、子の無い門番夫婦の間へ置いて川の字なりに寝る位ですから、盗み出して元へ返すことなどは思いもよりません。

ところで、扉とを開けた門番の爺じいと女中のお直は、たつた一ぺんで腰を抜かしてしまいました。主人の柳糸子は、昨夜ゆうべのまま、派手な友禅縮ちりめん緬めんを着たまま、卓テーブル子の上へ俯向になつて死んで居

たのです。背後うしろからは恐ろしい血潮が吹き出して、黄と銀とで大柄な模様を出した帯の上に溜り、その先は床に流れて贅沢な絨じゆう毯たんに恐ろしい汚点しみを作つて居ります。

時を移さず係官は出張しました。検屍の結果、傷は背後から短ピ銃ストルで真つ直ぐに撃ち抜かれたものと判りましたが、弾は胸骨に止つて居りますから、絶対に自殺ではありません。が、同時に、犯人の這入はいつた形跡も絶対に無いのです。

そればかりではありません。弾丸たまは糸子の二間ほど後方にある「踊る美人像」の手に手巾ハンケチで縛つた短銃ピストルから発射されたもので、此場合、美人像が引金を引いたとも思わなければ、どうしても解釈の方法がありません。

廊下に面した扉は締め切った上、内から鍵が差し込んであったとすれば、此処ここから入れる道理はありません。外ほかに扉が二つ、一つは寢室に通じて居りますが、寢室は一方口で、此処ここも問題にならず、もう一つの扉は、隣の篠井智恵子の室へやに通じて居りますが、これは長い間釘付けになって、絶対に開けた形跡がありません。

床にも天井にも、四隅の金網を張った小さい空気抜きの外には、鼠の通れるほどの隙間もなく、窓は寢室のも客間のも、嚴重とぎに鎖とぎされて、一々掛金が下りて居りますから、此処ここから入れる道理もありません——

編輯局の机の上に集った情報はこれだけです。この記事を適当に整理してセンセーショナルな標題を付けて、十次郎はホツと額

の汗を拭きました。

——悪い人は遠慮なく撃つておくれ——と言いつら、短銃ピストルを美人像の手に持たせ、引寄せるように頬摺りをしていた、昨夜の糸子の嬌態を思い浮べて、千種十次郎はすっかり憂鬱になつてしまいました。

「千種さん電話」

気が付くと助手が受話器を持つて此方こっちを見詰めて居ります。

「何誰？どなた あ、勇か、どうした。何？ 嫌疑者が挙げられた、誰

だ？ 何、石郷氏？ 何うして殺したんだ、何、其処そこまでは解ら

ない。呆れたなア、よしよし、それだけでも夕刊へ入れて置こう。

後引続きやってくれ、朝刊へは事によつたら昨夜ゆうべの事件もぶちま

けよう。あれは良い特種になるよ、糸子が死んだんだから、構わないだろうよ。左様なら、確り頼しつかんだよ——」

鍵穴からもぐる人

「柳糸子の怪死事件」は全くセンセーションそのものでした。新聞は毎日煮えくり返るように書き立てましたが、犯人はどうしても挙らないばかりでなく、事件の真相も、絶対にわかりません。

石郷氏は身分の関係で、任意同行の形式で取調べられましたが、間もなく釈放されてしまいました。女優と最後に争ったのは事実ですが、それは前の情人から贈られたという美人像に糸子が不思議

議な愛着を持って居る様子を見せつけられて、妙に嫉妬を感じたというに過ぎなかつたのです。全く石郷氏がどんなに細そりして居ても、鍵穴や扉との隙間から入って、人を殺せるわけは無かつたのです。

続いて関東新報の記事——柳糸子が前夜日比谷公園で脅迫された——というのにヒントを得たのでしよう。丹波高一が木賃宿から挙げられました。併しそれもダイヤの指環と、糸子の着物を入質しようとしたという以外には、犯罪と関係のある証拠は一つもありません。それに、糸子の殺された推定時間——十二時前後——には足の勇と銀座あたりを梯子はしごで飲み廻めぐって居たのですから、立派な現場不在証明ア
リ
バ
イを持って居るわけです。

ガストン・ルルウの書いた「黄色の部屋」の犯罪のように、外で撃たれた柳糸子が、何んか重大な理由で、苦痛を忍んで室の中へ入って倒れたのではあるまいかと言う説を立てた人もあります。が、屍体解剖の結果、そんな事は絶対にあり得ないということが証明されました。第一部屋の外へは血が一滴も流れて居ないので、屍体解剖を待つまでもなく、そんな探偵小説染みた解釈は成り立ちません。

「兄貴、三人目の容疑者が挙げたぞ」

足の勇が帰って来たのは、その翌日でした。

「誰だ？」

「隣室に居る女優の篠井智恵子さ」

「えッ」

「これが一番本当らしい」

「何んかえ、智恵子は鍵穴からもぐって隣室の柳糸子を襲撃したとでもいうのか」

「冗談じゃない、まあ聴いてくれ。——智恵子が、アパートの窓の外にある、幅三寸ほどのコンクリートの張出しを伝わって隣室に行き、多分一つだけ開いて居た窓から入って糸子を殺したろうというのだ」

「で、何処どこから何うどうして帰ったのだ」

「元の窓から出て、もう一度張出しを伝わって——」

「待ってくれ、それじゃ、智恵子が逃げた後で、死人の糸子が起

き上つて、証拠を湮滅いんめつするため自分を殺した智恵子の出て行った窓を閉めてやったとでも言うのか」

「どうも、お先つ走りをして困るな。そうじゃないんだ、窓は智恵子が出る時、上から激しく降したはずみで、独りで掛金が下りたろうというのだ」

「本当にそんな馬鹿な事を言う人間があるのかえ、呆れたもんだ。あの掛金は最新式ので、指でグイと廻さなきや下りない筈だ。気の毒だがもう一度行つて見張つてくれ、智恵子は直ぐ帰されるに決つて居るから」

「やれやれ、やり切れないね」

口では不承不承に言い乍らも、足の勇は持前の気軽さで、獵犬

のように飛出してしまいました。

名探偵の出馬

それから三月経ちました。事件は完全に迷宮に入って、女優殺の犯人は永久に挙りそうもありません。

多分——世間では斯う言いました——あの女の淫蕩な生活を憎んで、美人像が殺したんだろう。名作に奇瑞きずいは昔から付き物だ——と。

警視庁の花房一郎が、事件の中心に飛込んで来たのは、もうすっかり夏になってからの事です。

糸子の妹の雪子が、「せめて姉の仇かたきを」と言つて千種十次郎に泣き付いたのが発端で、この淋しい娘のために、曾かつて姉を保護する約を果すことの出来なかつた十次郎は、其足ですぐ花房一郎を訪ねたのです。

「それは困る」

所轄署への遠慮で、なかなか腰を上げなかつた花房一郎も、十次郎と雪子に口を酸すつばくさせた揚句、とうとう、

「では、調べて見るだけでも」

ということになりました。

それから三日、花房一郎は文字通り糸子の殺された室へやに籠りました。「日本家屋には滅多にない秘密の通路でも発見する気だろ

う」とか「床から壁から天井まで、一尺四方ずつにでも区切つて、^な誉め廻るように調べて居るだろう」と噂されましたが、事實は大違い、糸子の部屋に籠つた花房一郎は、電気蓄音機を聞いたり、新聞を読んだり、煙草^{たばこ}を吸つたり、一向取り止めの無い顔をして暮してしまいました。四日目の朝、急に電話を掛けられて雪子と十次郎がやって来ると、

「今晚小さい舞踏会を開いて下さい。いつぞやの晩と同じ顔触れで、同じ人数で、すっかり同じ事をやるのです。話も、飲物も、何も彼もあの晩の通り繰り返さなければなりません。事情があつても無くても、故人の追悼の意味では非出席してもらい度いと言うのです、それでも来られないと言う人があつたら、私の名を持

出しても構いません」

花房一郎の頭には、何んかしら素晴らしい計画がありそうです。

奇蹟は現われた

「あの晩の通り繰り返して下さい、一つも違つてはいけません。二と二をかければ、いつでも四になるように、同じ原因を積み重ねて行けば、必ず同じ結果になるものです」

花房一郎の言葉に、一座の人達は呆氣に取られて居ります。一座というと、あの事件があつて以来、すっかり評判を悪くしてしまつた石郷氏をはじめ、気味が悪いと言つて、隣室から三日目に

引越してしまつた女優の篠井智恵子、柳糸子の妹の雪子、それに千種十次郎、あとは糸子の女弟子橘久美子、糸子の憧憬者で、始終此処ここに出入して居た若い紳士が二人、それに花房一郎を加えて都合八人です。

花房一郎の計画を聞かされると、石郷氏は「フフン」と言つた顔をしましたが、相手が相手なので素早くとりつくろつて、真面まじ目めにうなずきません。

「ところで、死んだ糸子さんの代りは、帝都劇場の舞台と同じように、篠井智恵子さんに勤めて貰わなければなりません。篠井さんの代りは、雪子さんがやるのです。サア——」

花房一郎は独り呑込みに呑込んで、矢継やつぎばや早はやにジャズのレコー

ドを掛けたり、途方もなく賑やかな話を始めますが、皆んなの心持は、あの晩の通りになるどころではありません。舞踏も不承不承、話も兎角とかく滅入り勝ちで、お通夜のような、重い心持が室へやの中に漲ります。

「これでよし。と、此辺で丁度千種君が入って来た事になるだろう。お直さん、飲物を間違わないように」何んと言う不思議な再現でしょう。舞台監督の花房一郎が浮れば浮れるほど部屋の中の空気は次第にチグハグになるばかりです。

「此辺で糸子さんは、『踊る美人像』の手へ短銃ピストルを持たせたのでしよう、これは私が代ってやろう」

用意して来た同じような小型の短銃ピストルを、これも特に用意した

らしい女持の手巾ハンケチで美人像の右手に堅く縛ります。

十一時が鳴ります。

「皆さんは帰る時刻です——イヤ、本当に帰ってはいけません。帰った事にして、扉とだけを開けて、又閉めて、部屋の隅の方に掛けて、もう暫らく様子を見て居て下さい。それからお気の毒ですが、石郷さんは糸子さんの代役——智恵子さん——と争おっしやいしなければなりません。最初、石郷さんは何どんなことを仰おっしやいました？」

「——」

何んと言う馬鹿馬鹿しい芝居でしょう。石郷氏はすっかり腹を立てて黙り込んでしまいました。

「宜よろしい宜しい、強たつて実演しなくとも、言い争いがあつたと仮定しましょう。——ところで今度は私が石郷氏の代りになつて腹を立てて外へ出ましょう、智恵子さんはその儘、卓テーブル子の前に掛けて、糸子さんがやって居た通り、少し俯向になつて居て下さい。——後ろを振り向いてはいけませんよ」

智恵子は真蒼になりました。後ろを振り向くどころの沙汰ではありません。卓テーブル子の前に死んだ糸子と同じ姿態ポーズで坐るのは、首の座へ直るような恐ろしさでしょう。が、花房一郎はそんな事に少しも頓着しません。

「私が石郷さんの代りになつて室へやの外へ出たら、何誰どなたか、扉との鍵をかけて、そのまま鍵穴へ入れて置いて下さい。——あ、この役

目は千種君が宜い」

糸子の代りになつた智恵子は、卓^{テーブル}子の前に掛けて、美人像に背を見せたまま、身動きも出来ないほどの恐怖にさいなまれて居ります。眼はすっかり見開いてしまつて、藍のような顔に、恐ろしい神経性の痙^{けいれん}攣^{れん}が走ります。

あとの七人は、部屋の一隅に固まつて、カーテンの間から僅^{わず}かに見える美人像の手先——其^{そこ}処^こに気味悪く光る短銃^{ピストル}——と、智恵子の打ち顫う姿を見詰めて居ります。

一分、二分、三分と過ぎました。最初は嘲笑して居た石郷氏の顔も、すっかり硬ばつて、一座は本当に大きい息を吐^つくものもありません。到頭、奇蹟が現れました。いきなり、

ドーンと轟く短銃ピストル、美人像の手から一条の焰が走ると見るや、
「ウーム」

的になった智恵子は、そのまま氣絶して卓子テーブルに俯向きになり
ます。

扉との鍵を開けると、一陣の風と一緒に飛込んだ花房一郎、

「美人像は矢張り短銃ピストルを撃つたでしょう。併し、今度のは空砲
だから、怪我けがは無ない筈だ」

ズカズカと氣を失つた篠井智恵子の前へ。抱き起して介抱する
かと思うと、そうではなくて、氣を喪つたままの女へ、ガチリと
手錠をはめてしまいました。

「お騒がせしてすみません。犯人は此女です。皆様はどうぞ御随

意にお引取り下さるように」

花房一郎は慇懃に小腰を屈めます。打つて変つて隼のような慧敏な面魂。石郷氏に嘲られた、間延びのした面影などはもう微塵みじんもありません。

「どうして智恵子を犯人と判つたんだ」

翌あくる日の朝、警視庁の記者倶楽部くらぶで、花房一郎はニコニコし乍ら此問に答えました。

「あの美人像の手に縛り付けた短銃ピストルを発射させ得る者は、智恵子より外には無いのだ。——あの晩石郷氏が帰つてから直ぐ、智恵子はもう一度、糸子の室へやを訪ねると、糸子は美人像の短銃ピストルに

背中を向けたまま、卓子テーブルに顔を埋めて泣いて居たのだ。で、フ
ト見ると美人像の後ろが、自分の部屋との境の扉とで、扉は嚴重に
締つて居るがピストルの後方一尺位を距てて水平の位置に鍵穴が
あることを発見したんだ。

それが智恵子の為には恐ろしい誘惑さ。舞台上で自分の競争
者であるばかりでなく、長い間自分に眼をかけてくれた石郷氏ま
でが、近頃すっかり糸子のものになったのを見て、さり気ない様
にして居ても、腹の中は煮えくり返つて居た矢先だ。——ところ
で、短銃ピストルを何うして発射さしたというのか、まだ解らないかな
ア。智恵子は細くて丈夫な紐を一本用意して、その端つこを三つ
四つ、短銃の引金に巻き付け、一方の端つこを、境の扉との鍵穴を

通して、自分の部屋へ通したのだ。そして——用心が悪いから私が帰ったら後の扉を閉めて下さいよ——とか何んとか、泣いて居る糸子にお為ごかしに言つて引揚げ、糸子が扉を締めて、元の卓テ子プの前に戻つた様子を、鍵穴から覗いて確かめた上、短銃の引金に絡んだ紐の端つこを、鍵穴を通して、向うの部屋から急に強く引いたのだ。短銃は発射する。紐の先は結えてないから、そのまま引かれて此方ここちらへ来る。証拠は毛程も残らずに、憎い相手は短銃ピストルに撃ち抜かれて死んだ——これで全部だ。そんなに事件がよく解つて居るのに、何うしてあの晩の出来事を再演さしたかと言うのか。——それは斯うだ。あの犯罪はあまりに巧妙に過ぎて、とても一通りの女の考え出せる手ではない。智恵子に相違ないと

理窟の表は示して居ても、万一違つて居ては大変だ。そこである、間の抜けた芝居を思い付いて、犯罪当夜の事をそのまま再演させたのだ。どんなに気の強い犯人でも、自分の行^やつた犯罪を冷静に二度繰り返せるものではない。私は智恵子の心の動きを見たかったのだよ」

花房一郎は斯う言つて記者室を出て行きました。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂探偵小説全集」作品社

2007（平成19）年4月15日第1刷発行

底本の親本：「悪魔の顔」愛翠書房

1949（昭和24）年1月

初出：「文芸倶楽部」

1930（昭和5）年6月

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

踊る美人像

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>